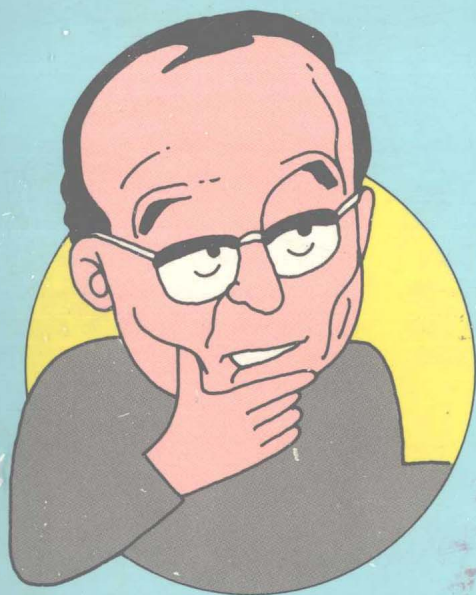


ざつくばらん神父 と13人

井上洋治対談集



山田	洋次
福田	恆存
加藤	一二三
高橋	たか子
田村	隆一
真継	伸彦
佐久間	良子
阪田	寛夫
平田	精耕
奈良	林祥
田中	小実昌
河上	徹太郎
遠藤	周作

《検印省略》

ざっくばらん神父と13人

昭和五十四年五月一日 第一刷発行

定 価／七二〇円

著 者／井上洋治

発行者／石川晴彦

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一ノ六

郵便番号 一〇一

振替 東京二一八〇番

電話 東京(03)二九四一一一一(大代表)

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店が本社へお申しいでください。

印刷／大日本印刷株式会社

ざっくばらん神父と13人

井上洋治対談集

ざっくばらん神父と13人・目次

山田洋次

寅さんには聖人のイメージがある／7

福田恆存

下町のつきあい感覚はキリスト教の愛の思想／25

加藤一二三

対局前の心の準備は祈ること／43

高橋たか子

テレーズはほんとうに悪魔的な女か／59

田村隆一

カトリック・詩・酒・女／77

真継伸彦

一輪の野の花でありたい／93

佐久間良子

休日には子どもたちに没頭するんです……／109

阪田寛夫

キリスト教という原理で怒られるこわさ／125

平田精耕

キリスト教が坐禪をとり入れる……それは新しい宗教の試みだ／139

奈良林祥

現代のよくできる子は非常に恐ろしい／155

田中小実昌

おやじと教会には相すまないばかりで……／173

河上徹太郎

松陰とキリスト／191

遠藤周作

神はすべてを許したまう／207

あとがき／228

●山田洋次

寅さんには聖人のイメージがある



映画監督。昭和六年（一九三一年）大阪府生まれ。昭和二十八年、東京大学法学部を卒業。二十九年、松竹大船撮影所助監督部に就職する。第一回監督作品は、「二階の他人」。その後、「下町の太陽」「馬鹿まるだし」などで認められる。四十四年に第一作が登場した「男はつらいよ」シリーズによって松竹のドル箱監督になる。

著書に『映画をつくる』がある。

寅さんの笑いの陰には哀しみが……

井上 私は山田さんの作られた「男はつらいよ」の寅さんに、完全に魅了されているんですよ。

山田 どうも恐れ入ります。

井上 ただ、どこで魅了されたのかなあってだいぶ考えたんですがね、なんとなくわかってきたような感じもするんです。きょうはそういうところをいろいろお聞きしたいと思っていますんですが、あの寅さんシリーズの映画では、渥美清さんの演技がものすごくきまっていますね。あの脚本は渥美さんに合わせて書かれたんですか？

山田 そうなんです。最初はテレビドラマだったんです。渥美清で何かテレビドラマをやりたいから、考えてくれないかって、ぼくのところへ持ち込まれて……。

井上 ああ、そうですか。

山田 ですから、あれはほんとに彼のために考えたもんなんです。

井上 なるほどね、そうですか。それじゃ、まさにピッタリというわけだ。で、もうずいぶんお書きになったんでしょう？

山田 ええ、これからやろうとしているのが二十三本目。

井上 たいへんでしょね、二十三本になると。

山田 ええ、まあ。

井上 見るほうも寅さんに関する先入観ができているし、そのイメージをくずさずに、しかも観衆をひきつけていくというのは、ずいぶんたいへんだろうなと思いますね。私は山の手で育ちましたし、いまは神父なんかやっているわけでして、下町とか、下町の庶民の感覚というのは、肌ではあんまりわからないかと思ってはいるんですが、それにもかかわらず完全に寅さんに魅了されたのはなぜかなあってときどき考えさせられるんですよ。一つはやっぱりあの映画に、日本人の生活感情の根底を流れている「さすらいの哀愁」みたいなものがあるからかなあと思いますがね。あの映画は、ぼくも、見てて確かによく笑うんですけども、しかし人生の哀しきさというか、そういうものをジーンと感じさせる映画だと思えます。そして、善意そのもののあの寅さんの笑いの陰にある哀しみみたいなものに、まずぼくはひかれたんじゃないかっていう気がしているんですけどね。山田さんご自身は、ご自分で監督していらっしゃって、寅さんの魅力はどういうところにあると思いますか？

山田 そうですねえ。まあ、ああいう設定と役柄と物語というのはなんとなくできてしまっているんで……。実は、ぼく自身もいまおっしゃったようなことについて、むしろ近ごろなぜだろうなあって考えているんです。いま、日本人とおっしゃったけれども、それは外国人とはどう違うのか、昔から旅という言葉を日本人はなぜか人生と重ね合わせて考えることがとても好きだけれど、それはなぜなのかなんて、ぼくも近ごろ考えて……。よくわからないんですけどもね。

井上 ということは、あの世界がすなわち山田さんの世界なんでしょうね。

山田 どうなんでしょうね。

井上 こういうふうにしたらこうだから、こういうようにとらえてやろう……というんじゃないかないわけでしょう？

山田 そうですね。おもしろい映画を作りたいという気持が、まあ最初にあるわけですね。そしておかしい人間を描きたいと思って作ったわけです。でも、最初に作ったときのことを考えてみると、でき上がって試写室で見たら、ちっともおかしくない映画になって、ひたすらクソまじめなだけで、困ったもんだなあと思ってたんです。でも、映画館に行ったら、なんだかみんながとてもよく笑うんで、ああ、やっぱりおかしかったのかなと思ったりして、それじゃまあ、こういうふうに作っていけばいいのかなと、やりつづけているような感じですね。

井上 ぼくもね、見ていて笑うことは笑うんですよ、確かに。でも、なんて言うのかな、しみみりと涙ぐみなくなるような感じのほうが、何か全体的に強いんですね。寅さんという、ほんとうに善意のかたまりで、およそ悪意がない人間、そしてその回りの設定も、たとえば妹のさくらや、おじさん、おばさんでも、とにかくけんかして出ていったりはするけれども、全体的には非常に暖かに彼を見ているわけですね。その暖かさにもかかわらず、やっぱり寅さんは失意のもとに旅立たなくちゃならない、トボトボとうしろ姿を見せて旅立っていかなくちゃいけない、そういうところに、わびしさの共感みたいなのを感じるんじゃないかと思うんです。確かに哀しさをそのままストレートに出しているものもたくさんありますよね、映画にはね。だけど哀しさを笑いでおおうつところが、庶民性、大衆性に通じているんじゃないかなアッ

て気がするんですがね。

山田 その、哀しみという部分については、作る立場ではあまりわからないんじゃないでしょうかねえ。

井上 あ、そうですか。

山田 ええ、ぼくは、いわばできの悪い弟の話を、ときどき励ましたり、しかったり、慰めたりしながら語るといふふうなつもりでいるんです。だから、よく、悲しかった、涙が出たって言われるけれども、そう言われてもう一回自分で見に行つて、ああ、そう言えば悲しいところもあるなあと思って思ったりするんであつて、ぼく自身は悲しいように作ろうと思つてはいけませんだといまでも思っているんですけれどもね。

井上 なるほど、そうなんですか。

山田 ですから、ま、最近慣れてしまいましたけれども、最初のころは、笑うということがまずぼくにとっては意外であつたし、その次には、「いやあ、泣いた」という人がいることがまた意外で、「へーえ、悲しかったの？」つて、びっくりしたもんですねえ。

井上 そうですか。そうすると山田さんご自身は、ただおもしろい男がいて、その男のこっけいな失敗談を……。

山田 ええ、ええ、そこところははずしじゃないと、いつも自分で思っているわけなんですけど……。ただ、自分では気がつかずにふっと、かわいそうだな、こいつも、と思つたりしているんでしょうけれどね。そこは意図的に演出しちゃ絶対いけないと思つてはいるんで

す。

井上　そこがかえって魅力なのかな。

山田　だからお客さんがワーツと笑って見ているのを、最初映画館で発見して、おかしいか悲しいかを決めるのは観客のほうであって、作るぼくのほうじゃないんだなあって思ったですね。

井上　なるほど。しかしおかしいことは文句なくおかしいですよ、あの映画は。それと、これは渥美清さんのうまいところだと思うけど、彼が、悲しいから故意に笑っているというところがたくさんあるでしょう。

山田　ええ、そうですね。

井上　そういうところが、ストレートに出ているよりかえってジーンとはね返ってくるのね。

山田　ええ、そう、つまり、あんまりつらいんでヘラヘラ笑う場合もあるんですね、人間は。ほんとうにつらくって、悲しくって、ポロポロ泣ける人はまだ幸せなんじゃないかって考えることはありますねエ。冷たい人間に囲まれていれば、メソメソ泣いていると、みんなソツポ向いてしまう。だからどうしてもこれからみんなにたよって生きていかなきゃならないと思う人は、いちばんつらいときに一生懸命ニコニコして、みんなに愛されようとするんじゃないかしら。

井上　うーん、なるほどねエ。

山田　だから、とってもつらいときにヘラヘラ笑っちゃう、あるいはそういうクセが身につい

ちゃった人間の悲しさっていうものがあるんじゃないかって思いますね。

井上 なるほどねエ。しかし寅さんの場合は回りが冷たいから泣けないんじゃないやなくて、その回りを思いやって泣けないんでしょうね。まともに泣いちゃうと、さくらでもだれでも、どうしようもなくなっちゃうから……。

山田 ええ、そういうこともありますね。

井上 ぼくは、ガンでなくなったかたの日記を見せてもらったことがあるんですよ。ガンだと自分にはわかってはいるけれど、回りの人はもちろんガンじゃないと言って励ましていますね。その人たちのために、自分は知らないふりして笑顔を見せるべきだということが書いてあるんですよ。これにはぼく、とっても驚いたんですがね。そういうやさしさみたいなもの、寅さんも持っている心情的なやさしさみたいなものが、なんとも言えないんですね。

山田 それもどこかでつながっていることだと思いますね。つまり、みんなの気持に負担をかけたくないという。おれはなんともないよという顔を一生懸命にしてみせる人間の、やさしいと同時に、どこかこう悲しい気持ね。ほんとに泣きたいときにワッと泣くのがいちばんいいのに……。

井上 受けとる側もそこまでわかってはいるからいつそうつらいっていうことも……。

山田 そう、そうですね。寅の場合はそこで見すかされちゃって、という……あの人、とても楽しそうだったねとみんなをだましおおせればまだいいんだけど、寅の場合は明らかに失恋して、悲しいことがわかりきっている。それなのにヘラヘラ笑っているから、みんなもし

かたなしに調子を合わせている、そういう不可思議な、なれあった感じというのがあるんですね。

井上 はあ、なるほどね。

落語から学んだリアリズムの方法論

井上 ところで、山田さんは落語の新作もお書きになるそうですね。

山田 ええ。それはですね、たまたま柳家小さんが新作をやりたいというのがきっかけなんです。普通あのクラスの落語家が新作をやるときは、小説家に頼むんですね。ところが、どうも小説家の先生に頼むと、あまりおかしくもない話を書いてきて、しかも一字一句違えずにやれって感じで、そういうのは落語じゃないんだという小さんの考え方があって、書き手をいろいろ物色してた。ぼくは、もう十年近く前ですけれど、ちょうど落語をネタにした映画を一つ作ってたんで、それでぼくのところに、ひとつ書いてみないかって言ってきたわけです。ぼくは落語のホンを書くっていうのは子どものころからの夢だったもんで、喜んでやりますと言ったのが縁で、それ以来彼と四本やっていますね。だいたい何かネタがあるんです。チェーホフとか、モーパッサンとか、あるいはロアルド・ダールですね。それを下敷きにして話をこしらえる。

井上 へーえ、チェーホフやモーパッサンと落語が結びつくわけですか。

山田 そうですよ。チェーホフなんていうのは、もう全部落語だって気がしますね、ぼくなん

かは。(笑)

井上 あらためて読んでみよう。(笑)

山田 小さんはチェーホフなんて知らないけど、チェーホフの話をすると、非常に興味を持ちますね。そういう話があるんですかと言うから、「これはロシアの作家の話ですよ」「へーえ」なんて。ダールという人の作品もきわめて落語的ですね、語り口が。

井上 フーン、これもまた驚いたな。

山田 落語というのは、ぼくの考えでは、明確にリアリズムの芸術だと思うんですよ。で、落語家が目ざすところは、観客にどのように明確なイメージを与えるかということであって、これはもう、明治時代から落語家に伝えられている言葉ですけど、噺家は高座から消えなくてはならないということなんですな。

井上 なるほど。

山田 つまり、ほんとうにおもしろいということは、その噺を聞くと、観客にはまるで芝居を見ているように、長屋の路地が映り、ご隠居さんが映り、熊さんが映り、そしてその語り手なんか忘れてしまうということなんですな。事実ぼくもそういう経験ありますね。何かそんな芝居見たような気がするけど、ほんととはそうじゃなくて、落語で聞いたんだというようなね。その落語家の印象は全部消えて、噺のイメージだけがそっくり残るといのが、つまりほんとうの名人なんだと。

井上 なるほど。